



Title	ファン・ゴッホとロシア文学：〈夜のカフェ〉、〈アルルの病室〉とトルストイ、ドストエフスキー
Author(s)	圀府寺, 司
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1997, 31, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ファン・ゴッホとロシア文学

〈夜のカフェ〉、〈アルルの病室〉とトルストイ、ドストエフスキー

圀 府 寺 司

ファン・ゴッホが夥しい数の文学作品を読んでいたことはすでによく知られている。少、青年期には主にゲーテ、ハイネ、リュッケルトなどのドイツ文学を読み、後にイギリスのヴィクトリア朝文学、そしてフランス自然主義文学を愛読した。これらの文学作品、とりわけヴィクトリア朝文学と自然主義文学とファン・ゴッホの絵画作品の関わりについては、すでに多くの研究に指摘されているが、ロシア文学については、ほとんどふれられることがなかった。1) たしかに、ファン・ゴッホが熱愛したフランス自然主義文学にくらべれば、仏訳ロシア文学は彼の読書範囲のごく一端でしかないし、当然ながら彼自身の絵画作品との繋がりも少ない。しかし、ファン・ゴッホの主要作品の創作過程あるいは自作の記述過程において、ロシア文学作品が重要な意味合いを担っていたことはまちがいない。本稿では〈夜のカフェ〉と〈アルルの病室〉の二点の作品をとりあげ、これらの作品とトルストイおよびドストエフスキーとの関わりについて、これまで知られていなかった資料を紹介しつつ論じることとする。ここでとりあげる絵画作品と文学作品の関係については、もともと不明瞭な部分が多く、そのことが「ファン・ゴッホとロシア文学」という研究が出されてこなかった理由のひとつでもある。この調査結果をまとめるにあたって、まだ不明瞭な部分は残されているが、扱うべき作品の重要性や今後のさまざまな研究の可能性を考慮し、ひとまず調査結果をまとめておくことにする。

ファン・ゴッホがフランスに移り住み、次第に質の高い作品を生みだすようになった1886年以降、フランスではロシア文学の流行現象が起こっており、ロシア語の読めない彼がロシア文学に接したのも、この流行のなかにおいてであった。そこでまず、このロシア文学の流行とファン・ゴッホとの関わりについて簡単にふれておきたい。

ファン・ゴッホがパリにいた弟テオのもとに転がり込んだ1886年、ロシア文学ブームの火つけ役となったエミール・メルシオール・ド・ヴォギュエの『ロシア小説』が出版されている。この本はその後のロシア文学の翻訳を促し、また、フランス自然主義文学の限界をめぐる議論の火つけ役ともなった。²⁾『フィガロ』、『ルヴュ・デ・デュー・モンド』、『ヌーヴェル・ルヴュ』といった当時の主要な新聞、雑誌にはロシア文学に関する記事が頻繁に掲載されており、これらの新聞、雑誌を読んでいたファン・ゴッホがロシア文学の流行現象に無関心だったとは考えにくい。実際、ファン・ゴッホの書簡集には、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキーの名がこの順に現われていて、その順序はフランスでのロシア文学導入の順序とも合致している。³⁾当時の論壇において、ド・ヴォギュエやブリュヌティエールといった批評家たちが、ヴィクトリア朝文学やロシア文学を楯に、フランス自然主義文学を批判していたことを考えれば、⁴⁾自然主義文学の崇拝者だったファン・ゴッホがロシア文学に関心をもっていなかったとは到底考えられない。実際、ファン・ゴッホがトルストイの仏語訳『幸福を求めて』という民話集を読んでいたことはわかっているし、それ以外にもトルストイやドストエフスキーらの作品を読んでいた可能性は十分に考えられる。

〈夜のカフェ〉

1888年9月初め、ファン・ゴッホは〈夜のカフェ〉(図1)を描き、弟テ

オ宛の手紙に何度かこの作品について書き記している。

「ぼくは赤と緑によって人間の恐ろしい情念を表現しようとした。」

(書簡533)

「ぼくは〈夜のカフェ〉の絵の中で、カフェというところが人が身を破滅させ、狂い、罪をおかしかねない場所だということを表現しようとした。つまり、ぼくは、柔らかなバラ色と鮮血やぶどう酒の赤とを対照させ、また、ルイ15世風、ヴェロネーゼ風の柔らかな緑と固い黄緑や青緑色と対照させ、それらすべてを青白い硫黄色の地獄の坩堝のような雰囲気の中に放り込んで、居酒屋の闇の力のようなものを表現しようとした。ただし外見は日本風の陽気さとタルタランの人の良さで蔽ってね。」(書簡534)

「〈種まく人〉や、今回の〈夜のカフェ〉のような過激な習作は、普通だったらぼくにも恐ろしく醜くひどい作品に思えるのだが、ここにあるドストエフスキーについての小さな記事のような何かに心を打たれると、このような作品だけが深い意味をもったもののように思えてくる。」(書簡535)

二番目の引用にある「居酒屋の闇の力」la puissance des ténèbres d'un assomoir という記述のうち、「闇の力」la puissance des ténèbres という言葉は、1887年にフランス語訳が出版されたトルストイの戯曲のタイトルと同じであり、また、「居酒屋」assomoir は、ファン・ゴッホが1883年にすでに読んでいたゾラの小説『居酒屋』のタイトルと合致している。⁵⁾ ファン・ゴッホがトルストイの『闇の力』を読んでいたことを示す確実な証拠は知られておらず、また、「居酒屋の闇の力」という記述には、引用語や大文字など、作品のタイトルであることを示すものはどこもされていない。

い。しかし、次に述べるような状況から判断して、この記述はやはり二つの文学作品を暗示していると考えられる。

『闇の力』は翻訳出版された翌年、1888年の2月10日にアンドレ・アントワヌによって自由劇場でフランス初演がなされている。⁶⁾ マスコミの前評判は芳ばしくなかったが初演は大成功を収め、一週間後の17日に再演された。ファン・ゴッホがパリを後にしてアルルに旅立ったのがこの年の2月19日。つまり、彼は初演、再演当時まだパリに住んでいたことになる。自由劇場は、ファン・ゴッホがスーラやシニャックらとともに自作を展示させてもらっていた数少ない公共の場であったし、この劇場の主な演目レパートリーは、ゴンクールなど、ファン・ゴッホの熱愛していた自然主義文学の作品であり、リヴォルドも指摘するように、この劇場の夜の集まりにファン・ゴッホも参加していたようなのである。⁷⁾

ファン・ゴッホが1887年当時、トルストイの本を少なくとも一冊は読んでいたことがわかっている。1887年の夏から秋頃に書かれた妹ウィル宛の手紙、同じく秋頃に書かれたベルナル宛の手紙、そして翌1888年の五月に書かれたテオ宛の手紙に、次のような記述がある。

「何よりもまず、トルストイの『幸福をもとめて』が気に入った」

(書簡W1)

「トルストイのロシアの民話集を読むことをすすめる。」 (書簡B1)

「きみは『幸福をもとめて』のなかで、あの人のいい男が一日で歩き廻れるだけの土地を買った話を覚えているかね。ところで、果樹園の装飾画で、ぼくはまさにあの男のようだった。」 (書簡480)

「幸福をもとめて」 *A la recherche du bonheur* は、1886年に仏訳出版されたトルストイの民話集である。⁸⁾ 三通の手紙の記述から、1887年当時、ファン・ゴッホがトルストイの作品を読んでいたばかりでなく、それ

に少なからぬ評価を下していたことがわかる。特に重要なのは、ウィルもテオもそれを読んでいて、読んでから半年以上経った頃に、テオにその内容を覚えているか尋ねていることである。

すでに述べたように、この時期はフランスでロシア文学への関心がたかまり、自然主義文学批判の流れのなかでロシア文学が論じられていた時期でもあり、ファン・ゴッホがロシア文学に少なからぬ関心を寄せていたことはまず間違いない。劇場通いの習慣もあったと思われるファン・ゴッホ兄弟が「闇の力」初演を実際に見ていた可能性も十分に考えられる。

次に、「居酒屋の闇の力」という記述が本当に文学作品を暗示していると考えてよいのか、という問題にふれておこう。ファン・ゴッホは「居酒屋の闇の力」という記述以外にも、書簡のなかで文学作品のタイトルと思われる言葉を何度か使っている。たとえば、弟テオと妹ウィル宛の手紙で「生の喜び」*la joie de vivre* という言葉が、少なくとも三度、何か含みを持たせた言葉として使われている。「生の喜び」はファン・ゴッホの読んでいたゾラの小説のタイトルであり、ファン・ゴッホはこの本をニューネン時代の〈開かれた聖書のある静物〉の中にも、*la joie de vivre* というタイトルが読めるように描き込んでいる。⁹⁾「居酒屋の闇の力」の場合と同様、手紙の中で「生の喜び」という言葉には引用譜も大文字もほどこされておらず、タイトルと認識できるようには書かれていない。しかし、この言葉に妙に含みを持たせて使っていること、そしてテオやウィルも文学愛好家であり、とりわけテオは兄と多くの文学的体験をも分かち合っていたことから考えて、少なくともテオはこれらの言葉が文学作品のタイトルであること、そしてそれが伝えようとする内容をある程度理解できたと推測できる。テオが兄と共に『闇の力』の初演を見ていたとすれば、この「居酒屋の闇の力」という言葉が二つのタイトルの組み合わせであることはおろか、そこに示唆されている含みをも読み取ることができたであろう。では、その意味合

いとは何だったのか。

この二つの文学作品と〈夜のカフェ〉に共通するモチーフは居酒屋、あるいはカフェである。ゾラの『居酒屋』に登場する「コロンブ爺さんの居酒屋」はジュルヴェーズの墮落を暗示する不吉なライトモチーフである。トルストイの『闇の力』では居酒屋 *traktir* は舞台上に現われないが、劇のなかで重要な役割を担っている。この戯曲はゾラの『居酒屋』ほどには知られていないので、作品中でのカフェの役割をはっきりさせるために簡単にそのあらすじを辿っておこう。

ピョートルは42歳の裕福な農民で、長く病の床に伏せていた。その二人目の妻アニシアは、生活に満足できず、若くて怠け者の農場の使用人ニキタと恋愛関係になった。ニキタの母親マトレーナは彼らの関係に気づき、ピョートルを毒殺してニキタと結婚するようアニシアを脅す。アニシアはこの脅しに従って夫を殺しニキタと結婚するが、この毒殺のことなど何も知らぬまま農場主になったニキタは、街の居酒屋 *traktir* で酒に溺れ、アニシアの連れ子アクリーナに高価なドレスを買ってやるなど、放蕩の限りをつくすようになる。アクリーナはやがてニキタの子を身ごもってしまい、このスキャンダルを隠すため、マトレーナ、アニシア、ニキタは生まれたばかりの赤ん坊を地下に生き埋めにする。後にアクリーナは他の男と結婚することになるが、この結婚式のパーティーの席でニキタはすべてを告白しはじめるのである。

この物語全体は、どろどろとした人間の情念と罪によってつよく色づけされており、居酒屋は舞台上には現われないものの、ニキタの墮落の場として位置付けられている。ファン・ゴッホが手紙に記した「人間の恐ろしい情念」や「カフェというところが人が身を破滅させ、狂い、罪をおかしかねない場所だ」といった記述は、そのままゾラの『居酒屋』にもトルストイの『闇の力』にもあてはまるといってよい。「居酒屋の闇の力のような

ものを表現しようとした」と手紙に記したとき、ファン・ゴッホはやはりこの二つの文学作品、そしてとりわけコロンブ爺さんの居酒屋とニキタが泥酔していた居酒屋を強く意識していたと考えられる。

手紙に記述が書かれたとき、〈夜のカフェ〉がほぼ完成していた。したがって作品構想のどの段階からこのような文学的連想がはたらいていたのか、つまり、アルルのカフェをモチーフとして選択しイーゼルを据えた段階からか、制作の進行とともに明確に意識されて言ったのか、あるいは、創作過程においてではなく絵がほぼ完成してからの作品記述の過程で浮かび上がったのかといったことは明らかではない。

さて、三人目の小説家ドストエフスキーと〈夜のカフェ〉との関わりは、ゾラとトルストイの場合とはやや異なっている。ファン・ゴッホがドストエフスキーの作品を読んでいたことを示す証拠は知られていない。さきに引用した手紙のなかでもファン・ゴッホは「ドストエフスキーについての小さな記事」を読んだと語っているにすぎず、しかし「そのような何かに心を打たれると、このような作品（種まく人）と〈夜のカフェ〉）だけが深い意味をもったもののように思えてくる」と書いている。つまり、ゾラとトルストイの作品が〈夜のカフェ〉の創作過程に関わっている可能性があるのに対して、このドストエフスキーについての記事は自作の記述過程にのみ関わっているということになるだろう。

書簡の内容と書かれた時期（9月12日頃）から判断して、問題の記事はおそらく1888年9月8日付の『フィガロ』紙に載ったジュール・プレヴェルによる演劇欄“*Courrier des Théâtre*”、または9月10日付の『ラントランシジャン』紙に載ったドム・ブラジウスによる“*Théâtre*”のいずれかであろう。この二つの新聞の名前は、この時期に書かれた他の書簡にも散見するもので、どれほど定期的かはわからないが、ファン・ゴッホが目を通していた新聞であることはまちがいない。¹⁰⁾ 二つの演劇欄にはともに、

ドストエフスキーの『罪と罰』の初演でオデオン座が再開されることを伝える文章が含まれていて、このオデオンの再開に関する部分はまったく同じ文面になっている。(論文末尾に全文資料)ファン・ゴッホが『夜のカフェ』について詳しい記述を始めたのが9月8日に書かれた書簡(533)であり、水彩によるスケッチを同封してテオに送ったのがその翌日(書簡534)、その後ウィルやゴーガン、テオ宛の手紙を計三通書いた後、12日頃にドストエフスキーについての記事にふれている。同じ手紙に「きみが興味をもちそうな記事を同封で送る。見に行くといいだろう」(書簡535)と書かれていることから、おそらくファン・ゴッホはこの記事を切り抜いてテオに送ったと考えられる。テオが実際にこの「罪と罰」を見に行ったかどうかはわかっていないが、この記事の内容で特にファン・ゴッホの関心をそそったと思われるのは、ドストエフスキーの顔とその苦難の生涯にふれた部分である。

「ドストエフスキーの顔はロシアの農民の顔であった。潰れた鼻、しきりに目ばたきする小さな目、傷や突出部ででこぼこになった広い額、ハンマーでも叩かれたようにへこんだこめかみ。M. ド・ヴォギューエは言う。『私は人間の顔でこれほどまでに苦悩の積み重なった表情を見たことがない』と。

悲劇的な場面に幾度も直面して、ドストエフスキーはてんかんになっていた。1849年には陰謀に巻き込まれて銃殺刑の判決を受け、刑場の杭に仲間とともに縛りつけられた。特赦がおりたのは、兵士たちがすでに銃をおろした時であった。彼はこの恐怖の瞬間を決して忘れなかった。……

ドストエフスキーはその『死の家の記録』において、浴室での苦しみのお話を記している。浴室から出ると、彼は一兵卒としてシベリア

の部隊に放り込まれたのである。」

ファン・ゴッホはこの小さな記事だけに心を打たれたのたのたのだろうか。それとも、1884年に翻訳されていた『罪と罰』をすでに読んでいて、その記憶を呼びさまされたのたのたのだろうか。11) その点については推測するしかないが、もし、彼がこの小説を読んでいたなら、冒頭部でラスコーリニコフが老人に出会う居酒屋も記憶していただろう。

ともあれ、この新聞記事がファン・ゴッホに〈夜のカフェ〉という作品の重みをより強く認識させるきっかけになったことはまちがいない。

〈アルルの病室〉

1889年の四月、アルルの病院で精神病の発作から回復しつつあったファン・ゴッホは、この病院の病室を描いている。(図二) 4月30日ごろ、彼は妹のウィルに宛てた手紙にこの絵について次のような記述を残している。

「アトリエをまた新たに借りることはまだできない気がする。それでもぼくは仕事をしていて、病院の二点の絵を描き終えたところだ。一つは病室、非常に長い病室の絵で白いカーテンをつけたベッドの列があり、何人かの患者がそのなかを動き回っている。壁と大きな梁のある天井はすべて白と薄紫の白あるいは緑がかかった白だ。あちこちに見える窓にはピンクあるいは明るい緑のカーテンがかかっている。床には煉瓦が敷いてある。突き当たりの扉の上方には十字架が彫られている。それはとても、とても簡潔なものだ。」(W11)

約6カ月後の10月、ファン・ゴッホはウィル宛に次のようにしたためている。

「ぼくはいま病院の共同病室を描いている。前景には大きな黒いス

トープがあり、それを取り囲んで灰色や黒色の大勢の患者がいる。その後ろには赤いタイルの床と白いベッドが二列に並んだ非常に長い部屋がある。壁は白だが、リラ色または緑がかった白で、窓にはピンクと緑のカーテンがかかり、背景には黒と白の服を着た二人の修道女がいる。天井には大きな梁があつて、すみれ色をしている。

ぼくは『死の家の記録』を書いたドストエフスキーについての評論を読んでいたのだが、そのせいで、アルルの精神病院で書き始めていた大きな習作にふたたび取り組むことになった。しかしモデルなしで人物を描くのは厄介なものだ。」(W15)

つまり〈アルルの病室〉は実際にこの病室にいた1889年4月に描き始められ、半年後の10月にサン・レミの精神病院で再び手を加えられて完成した。そして、その描き直しのきっかけとなったのが「ドストエフスキーについての評論」であった。この作品が半年後にどのように描き直されたかは、ここに引用した二つの記述を読み比べ、作品そのものをよく観察することによって知ることができる。たとえば、最初の手紙には前景の人物群やストーブにはまったく言及していない。これほど重要なモチーフを記述からはずすことはまず考えられないし、四月のアルルでストーブが使われているはずもないから、これらはまずまちがいになく10月に加筆されたものであろう。

作品をよく観察してみると、リタッチの跡を容易に見分けることができる。前景中央にあるストーブの上部や胴体の円形部分は、輪郭線が描かれているだけで中央部がまったく塗り込められておらず、床が透けて見えている。また、ストーブから上に向かって伸びる煙突も、一度乾いた絵の上にやや薄めの絵の具で描かれているのは明らかで、左上部では絵の具がしたり落ちて見えているのが見える。前景の人物群や左端の椅子なども半年後に

描き加えられたものであろう。そのことはこれらの部分の絵の具のりぐあいを見ても、また、さきに引用した手紙に「モデルなしで人物を描くのは厄介なものだ」と書かれていることから明らかである。

残念なことに、ファン・ゴッホにこのような大幅な加筆をさせた「ドストエフスキーについての評論」がどのようなものであったのかはわかっていない。そもそもファン・ゴッホの手紙には、『死の家の記録』を書いたドストエフスキーについての評論を読んでいた (J'avais lu un article sur Dostoïevsky qui avait écrit un livre Souvenirs de la Maison des Morts) と記されているだけで、いつ読んだのかさえあまりはっきりとしない。アルルで描きはじめてから加筆をするまでの期間、1889年4月から10月の間に出版されたドストエフスキー関連の記事はかなり少なく、フランスでのドストエフスキー受容を扱った包括的研究を見ても、また、ファン・ゴッホが読んでいた当時の新聞、雑誌類を綿密に調べても、彼が読んだと考えられるような記事は見当たらない。ただ、手紙の記述に「死の家の記録」というタイトルがあげられていることから、この小説に関する内容だったのではないかと推測できる。

ファン・ゴッホが『死の家の記録』を読んでいたことを示す証拠は知られていない。しかし、この小説の第二部冒頭に「病院」と題された章があって、この章には「あらゆる種類の『不幸な人』でいっぱい」の陸軍病院での体験が詳細に記されている。なかでも興味深いのは次の一節である。

「パイプと煙草入れは、肺患者もふくめて、ほとんどの者がもっていたが、これは寝台の下にかくされていた。医師をはじめ病院の幹部たちはほとんど検査をしなかったし、パイプをもっている者を見かけても、気がつかないようなふりをしていた。しかし病人たちもよく気をつけていて、煙草を吸うときはかならずペーチカのそばへ行った。寝台の

上で吸うのは夜更けだけだった。夜更けには、たまに病院の衛兵司令の士官が来るくらいのもので、あとはだれもまわってこなかった。」¹²⁾

この場面に登場するモチーフと、ファン・ゴッホが〈アルルの病室〉に加筆したモチーフとは妙に類似している。これは偶然だろうか。日本語訳で「ペーチカ」となっている部分は、フランス語訳ではただpoêleと訳されていて、単に「ストーブ」としかとれない。そして、この「ストーブ」のそばで病人たちが煙草を吸っているのである。ファン・ゴッホが加筆したのもストーブとその周りに坐る病人たちで、彼らのうち三人までもが煙草、またパイプを吸っている。ファン・ゴッホはパイプをくわえた人物の肖像を何度か描いてはいるが、煙草を吸う複数の人物が描かれていることは珍しいし、また、この絵に加筆がほどこされたのが南フランスの10月20日頃、つまり、ストーブに火が入り周りに病人が集まるような時期ではなかったことも付け加えておいてよいだろう。

確かなことは、この絵の前景にある多くのモチーフが加筆されたものであり、しかもそれらのうち少なくとも人物群はモデルなしで描かれたということである。ただ、ファン・ゴッホと『死の家の記録』との関わり、そして「病室」の一節との関わりについては、そのことを示す確実な証拠はないため、仮説に止めおかれるべきものであろう。しかし、彼が〈アルルの病室〉を最初に描いて間もなく、5月にサン・レミの精神病院に入り、文字どおり「あらゆる種類の不幸な人でいっぱい」の病院でみずからも発作を繰り返していたことを考えれば、『死の家の記録』の中に描き出されているどろどろとした病室のイメージがファン・ゴッホに強い衝撃を与えていたことは十分に考えられるだろう。

ファン・ゴッホの絵画作品が文学作品とどのように関わりつつ制作され、

記述されてきたかという問題、さらには絵画作品というものが、どのように言葉にからめとられつつ制作され、受け止められ、伝えられていくのかという問題を考えるにあたって、本論は何らかの材料を提供できたと思う。創作過程における文学作品の関与については不明瞭な部分が多く残っているが、これは資料の不足によるものというよりは、以上の論考だけでは明らかにはできない、より本質的な問題にかかわっているからであろう。

資料

Jules Prével, "Courrier des Théâtres," *Le Figaro*, septembre 8, 1888, p.4.

Dom Blasius, "Théâtre," *L'Intransigeant*, septembre 10, 1888, p.3.

D'aujourd'hui en huit, réouverture de l'Odéon avec *Crime et Châtiment*, divisé non en actes, mais en tableaux, dont voici les titres: *Le Cabaret du marché au foin*. - *Le Logis de L'Usurière*. - *Chez Rodion*. - *Le Bureau de police*. - *La Mansarde d'Alena*. - *Chez Sonia*. - *Les Bords de la Néva*. Ces sept décorations nouvelles ont été brossées par M.Lemeunier.

M.Porel, mettant en pratique une théorie qu'il a déjà exposée sur les nécessités du spectacle moderne, a décidé que la pièce nouvelle ne comporterait qu'un seul grand entr'acte de 20 minutes, au milieu de la représentation, et un entr'acte de 5 minutes entre l'avant-dernier et le dernier tableau, pour permettre au public de retirer les objets déposés au vestiaire. De cette façon, la pièce commencera à 9 heure et finira à 11 h. 1/2.

On sait que le roman de Dostoïevsky a obtenu un succès énorme. "Quand paru *Crime et Châtiment*, dit M.de Vogüé, toute la Russie en fut malade!" L'effet de ce livre fut tel qu'un étudiant de Moscou assassina une prêteuse sur gages dans des circonstances de tout point semblable à celles imaginées par le romancier.

*

*

*

Dostoïevsky, l'auteur du roman d'où est tirée cette pièce est mort

en 1881, à soixante ans. Il a eu des obsèques prodigieuse. Sauf peut-être à la mort de Skobeleff, on ne vit en Russie de funérailles plus imposantes. Les princes de la famille impériale marchèrent derrière le cercueil.

Le visage de Dostoïevsky était celui d'un paysan russe: le nez écrasé, de petits yeux clignotants, le front large, bossué de plaies et de protubérances, les tempes renfoncées comme au marteau. "Jamais, dit M.de Vogué[sic], je n'ai vu sur un visage humain pareille expression de souffrance amassée."

Dostoïevsky était devenu épileptique, à la suite d'un scène tragique. Impliqué, en 1849, dans un complot, il fut condamné à être fusillé. Il avait été attaché au poteau avec ses camarades: la grâce n'arriva qu'au moment où les soldats abaissaient leurs fusils. Il n'oublia jamais cette minute horrible angoisse. La peine de mort fut commuée en travaux forcés, en Sibérie. Dostoïevsky a écrit, dans ses *Souvenirs de la Maison des Morts*, le récit de ses souffrances au bagne. Au sortir du bagne, Dostoïevsky dut entrer, comme simple soldat, dans un régiment de Sibérie.

Mme Dostoïevsky vit encore: Dostoïevsky l'épousa en Sibérie, elle était veuve d'un condamné politique.

Il eut des années de grande pauvreté, et il lui fallut subir bien des épreuves avant de pouvoir composer en paix ses grands romans, *l'Idiot*, les *Possédés*, les *Frères Karamazoff*.

* 本論中の書簡番号は次の文献による。

De Verzamelde Brieven van Vincent van Gogh, Amsterdam-Antwerpen 1974. (邦訳 「ファン・ゴッホ書簡全集」二見史郎ほか訳 みすず書房 1969-70)

** 本稿は国際比較文学学会 (1997年於レイデン大学) の発表原稿ならびに『比較文化研究』(1997年)に発表予定の論文に加筆、補足したものである。

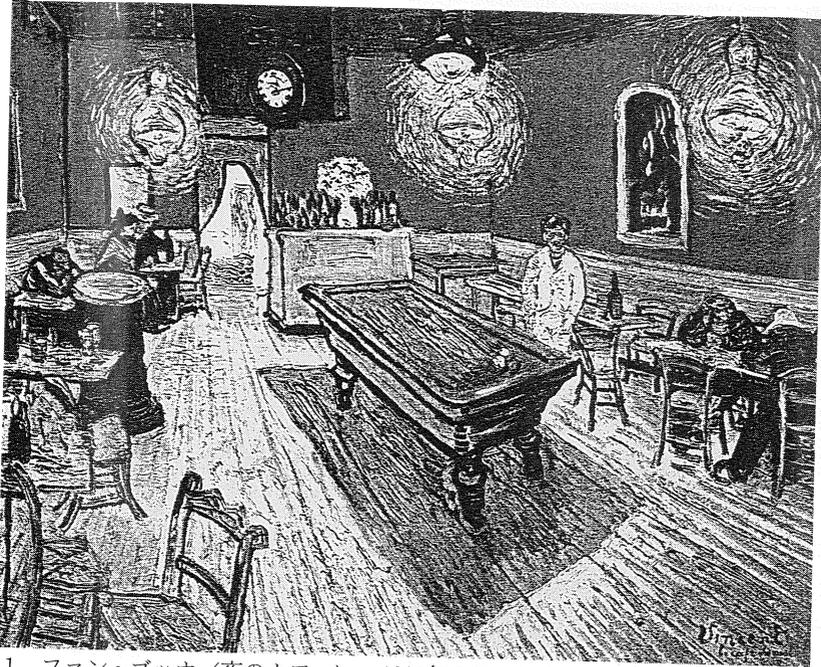
注

- 1) ファン・ゴッホとロシア文学との関わりにふれた文献としては以下のようなものがある。Hammacherの論文が2ページほどにわたってこの問題を取り扱っているものの、他はきわめて断片的にふれている程度である。
M.E.Tralbaut, *Vincent van Gogh, le mal aimé*, Lausanne, 1969(索引参照), A.M.Hammacher, “Van Gogh, Michelet, Zola”, *Vincent* 4 (1975) no.3, pp.2-21(特にpp.18-9), Judy Sund, *True to Temperament, Van Gogh and French Naturalist Literature*, Cambridge 1992
- 2) E.M.de Vogüé, *Le Roman Russe*, Paris 1886. フランスにおけるロシア文学の受容については多くの研究がある。F.W.J.Hemmings, *Russian Novel in France 1884-1914*, London 1950. ドストエフスキー受容については以下の論文を参照。(詳細な文献表付) K.G.Seely, *Dostoevsky and the French Criticism from the beginning to 1960*, Ph.D.dissertation, Columbia University, 1966. Jean-Louis Backès, *Dostoïevsky en France 1880-1930*, doctoral dissertation (unpublished) Université de Paris IV, 1972. トルストイ受容については Thaïs S. Lindstorm, *Tolstoï en France 1886-1910*, Paris 1952 を参照のこと。
- 3) 書簡448, 451, 457, B1, W1, 480, 535, 542, 543, 604, W15参照。
- 4) M.F.Brunetière, “La Banqueroute du Naturalisme”, *Revue des Deux Mondes* 1887, Sept.1, pp.213-24. E.M.de Vogüé, *op.cit.*(注2)の序文。E.Hennequin, *Ecrivains francisés*, Paris 1889. F.W.J. Hemmings, *op.cit.*(注2)、Chapter VI, “The Russian novel and the disintegration of Naturalism, 1) Maupassant and Huyamans”, p.91ff.
- 5) ジャン・セズネックは「闇の力」という言葉がトルストイの戯曲のタイトルと一致していることを指摘してはいるが、それ以上のことにはふれていない。Jean Seznec, “Literary inspiration in Van Gogh,” *Magazine of Art*, 43 (1950) pp.282-88, 306-7. B.Welsh-Ovcharov, *Van Gogh in Perspective*, Englewood Cliffs, 1974 所収 p.130.
- 6) Comte Léon Tolstoï, *La Puissance des ténèbres, drame en cinq actes*, trad. par E.Halpérine, Paris (Perrin) 1887. この戯曲の上演に関しては下記を参照。F. Pruner, *Le Théâtre Libre d'Antoine, I: Le répertoire étranger*, Paris 1958. *ibid. Les luttes d'Antoine: Au Théâtre Libre*, Paris 1964. André Antoine, *Le Théâtre Libre: théâtre public fondé par André Antoine*, Paris 1890 (「闇の力」初演に関する批評文を多く収

録)。Matei Roussou, *André Antoine*, préface de R.Kemp, Paris 1954 (舞台写真収録)。

- 7) John Rewald, *Post-Impressionism*, London 1978, p.64. B.Welsh-Ovcharov, *Vincent van Gogh: his Paris period 1886-1888*, Utrecht-The Hague 1976, p.221.
1888年4月初めにアルルで書かれた手紙には、“Le tableau du jardin avec amoureux est au Théâtre Libre” (書簡473) と記されている。Welsh-Ovcharov によればこの劇場でファン・ゴッホたちの展覧会が開かれたのが1887年の11-12月頃から翌年の1月までで、その後もファン・ゴッホの作品はしばらくこの劇場に掛かっていたことになる。
- 8) Comte Léon Tolstoï, *A la recherche du bonheur*, trad. et préf. par E. Halpérine, Paris (Perrin) 1886. ウィル宛の手紙で、ファン・ゴッホがこの本にふれた直後にモーパッサンのMont-Oriolにふれている。この小説やPierre et Jeanにはロシア文学の影響が指摘されており、それらを並記している点は興味深い。モーパッサンにおけるロシア文学の影響については Hemmings, *op.cit.*, (注2) Chapter VI, “Russian novel and the disintegration of Naturalism, (1) Maupassant and Huysmans”, p.91ff. を参照。
- 9) La joie de vivreという言葉は書簡399、512、W12で使われている。この点については Tsukasa Kōdera, *Vincent van Gogh, Christianity versus Nature*, Amsterdam-Philadelphia 1990, p.45ff参照。
- 10) 9月8日に書かれたと思われる書簡533には次の記事にふれた箇所がある。“La suicide de M.Lévy-Bing” *L’Intransigeant* septembre 8 (1888) p.2. *L’Intransigeant*とLe Figaro紙はそれぞれ書簡470, 490, B6 および 537, 583, 588...でふれられている。
- 11) Th.Dostoïevsky, *Crime et Châtiment*, trad. par V.Derély, 2 tomes, Paris (Plon) 1884.
- 12) Th.Dostoïevsky, *Souvenirs de la maison des morts*, traduit par M. Neyroud, préface de E.M.de Vogue, Paris(Plon)1886, p.202.邦訳は工藤精一郎訳『死の家の記録』新潮文庫1976年による。

(文学部助教授)



1. ファン・ゴッホ 〈夜のカフェ〉 1888年9月 油彩・カンヴァス 70×89cm
F463 JH1575 エール大学美術館蔵



2. ファン・ゴッホ〈アルルの病室〉1889年4月（10月に加筆）油彩・カンヴァス 74×92cm F646 JH1686 オスカー・ラインハルト・コレクション、ヴィンタートゥール（スイス）